

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381337

研究課題名(和文) 病気を理由に学校を長期欠席している児童生徒の学びの支援システム開発に関する研究

研究課題名(英文) Study on the development of learning system for the children with health impairments in a state of long-term absence from school

研究代表者

滝川 国芳 (TAKIGAWA, KUNIYOSHI)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：00443333

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、病気のある児童生徒の教育支援の方略として、ICTを活用した授業形態の有効性と課題を明らかにすることを目的とした。特に、病気による自宅療養のための学校という場に出向くことができない長期欠席することになる児童生徒への、病院にある学校の教師による教育支援におけるICTの活用について検討を行った。その結果、カメラ画像だけでなく、同時に文書、動画、ホワイトボード等の共有が可能となるインターネットによるWEB会議システムでの遠隔授業は、学力の補完だけではなく、自宅療養中の基本的な生活習慣にも好影響を及ぼすなど、新たな学びの支援システムとなることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to shed light on effectiveness and agenda for learning system of the ICT (Information and Communication Technology) utilization for the children with health impairments. In particular, it was examined for a way to use learning system for the children being at home recuperating at home with the utilization of ICT by teachers of the school in hospital. As a result, Distance education using web conferencing systems by the Internet technology enables sharing that the sharing which are documents, movies and white boards as well as camera pictures is effective not only completion of academic achievement, but also activities of daily living, and it is clear that this way can be a new learning system for the children who need special supports.

研究分野：特別支援教育

キーワード：病弱教育 病気の児童生徒 ICT活用 遠隔授業

1. 研究開始当初の背景

日本において、病気のある子どもの教育は、特別支援教育の中の病弱・身体虚弱教育として、制度上位置づけて行われている。病弱・身体虚弱である子どもを対象に教育を行うことを目的に、学校教育法で、特別支援学校(病弱)や小中学校の病弱・身体虚弱特別支援学級を設置することができる定められている。

病気により病院での入院治療することとなった子どもが教育を受けるためには、それまで在籍していた小学校、中学校等から、病院内にある特別支援学校(病弱)、小中学校の病弱・身体虚弱特別支援学級等の病院にある学校に転学することが必要となる。

また、入院することとなった子どもは、入院前まで通っていた学校を長期間欠席していることも少なくない。また、入院中においては病状や治療等によって、授業時数の制約、学習の空白や遅れ、病気の不安等による学習意欲の低下、身体活動の制限、経験の不足や偏りによる社会性の未熟などの傾向が見られる。長期の入院により家族や友達と離れていたたり、入退院を繰り返すことで友達関係を築きにくかったりすることもある。

一方、病弱教育制度が日本に存在するものの、文部科学省平成 23 年度学校基本調査によると、平成 22 年度間に病気を理由に、年度間通算 30 日以上欠席した児童生徒が、小学校で 19,611 人、中学校で 16,769 人存在する。不登校を理由に長期欠席している児童生徒への国の施策は、文部科学省初等中等教育局児童生徒課を中心に行われているが、病気を理由に長期欠席している児童生徒への施策は、所轄する課が明確でなく、全く取り組まれていない現状にある(滝川, 2008)。

地域における特別支援教育を推進して上で、特別支援学校がセンター的機能を果たし、小中学校を含めた地域の中核的な役割が求められている。小中学校の通常の学級に在籍

し、病気を理由に長期欠席している児童生徒は、特別な教育的ニーズを有しているといえる。このことから、病弱教育を担当する特別支援学校が、病気を理由に長期欠席している児童生徒の教育支援に果たす役割は大きい。

研究代表者および研究分担者は、病気療養のため入退院を繰り返すことによって、自宅療養等により、病気を理由に長期欠席をした経験のある児童生徒のうち、病院の中にある特別支援学校に在籍する児童生徒に対する支援モデルの実証研究を 2007 年から行い、ICT (Information and Communication Technology) の活用によって、前籍校復帰への意識の醸成、スムーズな復学が行われることを確認した(滝川ほか, 2008)。

一方、韓国においては、2005 年の特殊教育振興法の改正により、病気(健康障害)の児童生徒への教育が、特殊教育対象の障害カテゴリーである健康障害教育として新たに追加されることとなった。韓国国立特殊教育院は、韓国病院学校ホームページ Hospital School of Korea を作成し、国内の病院学校に関する情報の一元化を図っている。また、韓国国内に張り巡らされた高速情報インフラを用いた画像講義システムを構築し、病気の子も達が自宅や病室に居ながら、WEB 上で授業に参加することができる遠隔授業によるサイバー学校が稼働している。この手法は、日本の病気を理由に長期欠席している児童生徒への教育支援と成り得ると考える。

2. 研究の目的

病気を理由に学校を長期欠席している児童生徒への教育支援の方略として、ICT を活用した病弱教育における遠隔授業の有効性と課題を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 退院後、自宅療養により学校を長期欠席している児童生徒の学習や生活状況の実態を把握する。

(2) 自宅療養している病気の子どもを対象に ICT を活用して授業を行っている韓国のサイバー学校の学校制度上の位置づけ、仕組みについて、文献研究及び現地調査によって明らかにする。

(3) 日本における病気による長期欠席している児童生徒への遠隔授業について、1, 2 の結果を踏まえて、有効な指導内容、指導方法、評価の在り方を開発する。

4. 研究成果

病気を理由とする長期欠席児童生徒は、自宅療養などにより、「学校」という場に行くことができないために、学習の機会が著しく少なくなることが、改めて確認された。病院に入院することになると、日本の教育制度では、病院にある学校である特別支援学校や特別支援学級において学習する機会を得ることができるものの、入院治療を終え、退院後に小中学校の通常の学級に在籍することになる自宅療養中の子供は授業を受けることができない。つまり、入院中は、授業を受けることができていた状況が、病気が回復して退院することによって、教育を受ける機会を失う現状がある。また、自宅療養している子供は、学習の遅れだけでなく、基本的な生活習慣が乱れる事もあることが確認された。一方、少数ではあるが特別支援学校(病弱)には、退院後も入院前に通学した前籍校に学籍を異動させることなく、訪問による教育に切り替えて、継続して、必要に応じて教育を行っている事が確認された。

平成 27 年 3 月、韓国ソウル特別市にあるソウル市教育情報院教授学習支援センター「蜂蜜の味虹学校(ハングル語学校名の直訳)」の視察を行った。この学校は、教育士・研究員・事務員の 3 人が学校運営を担当している。オンラインリアルタイムの双方向 Web 会議による画像講義を担当する教師は、現在 35 人であり、画像講義をするためのブースが

17 室設置されていた。対象とする学生は、ソウル特別市、大田広域市、江原道、京畿道、忠清北道に所属する健康障害学生であり、講義対象の教科は、国語、数学、英語、科学、社会、韓国史(高校 1 年生)である。この教育システムの一番の目的は、健康障害学生の学習権の保障であり、病気療養中における友達や教師との交流を通じて感情的な安定に寄与することである。そして、原級留置システムがある韓国において、病気による欠席での出席日数の不足によって進級することができない事態を避けることである。画像講義を受けるためには、保護者または在籍する学校長の申し出によって、所管する教育庁が作成する健康障害に起因する画像講義の必要性に関する公文書が蜂蜜の味虹学校に提出されることを必要とする。画像講義の会議室予約の方法、画像講義への接続のためのサポート体制、授業教材の作成方法等についても聴取することができ、日本におけるシステム作りの糧とすることができた。

本研究での病気による長期欠席している児童生徒への ICT を活用した遠隔授業の取り組みは、株式会社 4NB(フォーエエヌビー)社の WEB 会議システムである Video Office を用いて実証を行った。Video Office は、ソウル市教育情報院教授学習支援センター「蜂蜜の味虹学校」で使用されているものと同一システムであり、カメラ画像だけでなく、同時に文書、動画、ホワイトボード等の共有が可能となっている。病気による長期欠席している児童生徒は、入院期間の短期化と頻回化により、病院にある学校への在籍と地元校への在籍を繰り返すことになる。そこで、病気の児童生徒への WEB 会議システム活用の有効性を検証するため、研究協力機関である大阪市立光陽特別支援学校病弱部門において、前籍校との交流及び共同学習、本校・分教室・訪問学級間での学習を実施した。病院内の教室は少人数での授業が日常的に行われ

ていたが、WEB 会議システムを活用することにより、少人数同士の教室がネットによってつながり、双方間の距離を意識することのない空間において、各自の病状に配慮した学習活動を進めることができることを確認した。さらに日頃は、同年代の友達とのコミュニケーションが積極的に行われることから社会性の向上も期待できることが分かった。病弱部門の教員が、病状により、病院内の教室に出向くことができない病室の児童生徒も含めた WEB 会議システムによる学習の展開について、検討会を実施するなどの授業改善にもつながった。病院内の教室と病室とを WEB 会議システムを用いた双方向の授業による教育支援が有効であったことを踏まえ、自宅療養を余儀なくされている長期欠席している児童生徒への教育支援への ICT 活用の方略について、特別支援学校(病弱)の教職員、隣接する医療機関の関係者等と連携し、研究を推進した。大阪市総合医療センター内及び大阪市立大学医学部附属病院内の大阪市立光陽特別支援学校分教室において、WEB 会議システムを活用して、治療終了後に退院し、住民登録されている自治体(関東甲信越地区)の小中学校に転校しながらも、自宅療養によって通学できない生徒の自宅と分教室とにおいて、遠隔授業を実施した。学力の補完はもちろんのこと、遠隔授業を行うことがきっかけとなって、起床時間が一定したり、着替えをして生活したりするなど、基本的な生活習慣にも好影響を及ぼすことが確認できた。また、保護者からも、遠隔授業の広がりを期待する感想を得ることができた。

以上のことから、病気を理由に学校を長期欠席している児童生徒を対象に、WEB 会議システムを用いた特別支援学校による教育支援が新たな学びにつながる事が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

滝川国芳、インクルーシブ教育システムの構築のための病弱・身体虚弱教育の役割、東洋大学文学部紀要教育学科編、67、2015、97 - 109

滝川国芳、日本の病弱・身体虚弱教育における教育情報の共有と活用に関する研究動向、特殊教育学研究、査読有、51(4)、2013、391 - 399

〔学会発表〕(計 2 件)

濱崎麻弥、滝川国芳、谷口明子、通常の学級に在籍している病気のある子どもへの教育支援 - 学習支援の記録より得られた子どもと保護者が抱える課題 -、日本育療学会第19回学術集会、2015年8月23日、東洋大学(東京都・文京区)

濱崎麻弥、滝川国芳、谷口明子、病気による長期欠席・不登校の児童生徒への教育的支援 - 副次的な学籍の活用について -、日本育療学会第18回学術集会、2014年8月30日、上越教育大学(新潟県・上越市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

滝川 国芳 (TAKIGAWA, Kuniyoshi)
東洋大学・文学部・教授
研究者番号： 00443333

(2)研究分担者

西牧 謙吾 (NISHIMAKI, Kengo)
国立障害者リハビリテーションセンター
(研究所)・第三診療部
研究者番号： 50371711

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

橘岡 正樹 (KITSUOKA, Masaki)
濱崎 麻弥 (HAMAZAKI, Maya)